

北京 一九九三年、六月二二日

例えば、悔恨ということがあるだろう。僕らが何ものかをあとにするとき、避けがたく悔恨ということはつきまとってくる。百パーセントの現在というものはない。現在というものは、一切の過去、一切の記憶というものが全面的に開花する、そのようなものではありえないのだ。過去を振り返るとき、僕らがそこに認めざるを得ないのは弁証法からこぼれたもの、唯一的であり、時間的な延長をもたないもの、従って現在というこの瞬間においてさえ、手のひらをこぼれてしまう、そういったものの存在だ。現在というものは過去を完全には救いとることができない。それは現在が現在というものを包括することができないということと同じことだ。いわば交通にかからないものが存在する。唯一的であるというのはそういうことだろう。

唯一性が歴史的な体験として、個的に凝結するとき、その固体的なありようは悔恨というある種の湿り気を一気に固化し、断念というガラス質の核へと変性するだろう。だが、僕らは僕らの体験のいったい何をどのようにして断念しうるだろうか。すでに歴史的な体験のガラス質が風化し、さらさらと砂のようにこぼれていく現在という瞬間において。

だがしかし、おそらく断念とは〈個〉の要なのだ。あるいは〈個〉の要には断念という固体的な否定性が作動している。ある種の言葉が僕たちに与える身震いとは、言葉がこの固体的な否定性に触れるという経験に他ならない。現実に対する断念、ある種の交通関係の断念が、現実という水平性に対して、〈個〉の人格、〈個〉の輪郭、〈個〉の存在というものを浮かび上がらせる。〈個〉の発する言葉は、それが〈個〉の断念に触れるという限りにおいて〈個〉的なものだ。〈個〉的な言葉の要には断念が作動し、それは情報であるというよりもむしろ沈黙によって備給される言葉なのだ。

断念というものが風化するとき、言い替えれば〈個〉というものが現実において風化するとき、〈個〉的な沈黙が現実の水位に飲みつくされ、断念が現実に対して自らをうるたえるとき、それはいわば垂直性の次元が圧縮されて、一切が現実という水平的な次元に総括されるという過程だ。〈個〉という現実に代わって、新たに現実というものが過去から現在までを総括するものとして迫り上がってくる。いわば〈個〉という無数の垂直性が現実を産出し、現実を構成するという構図に取って代わって、今や現実というただ一枚の地図が現実的となる。〈個〉は虚構となり、亡霊となり、齒軋りとなり、あるいは現実によって担保された個だけが個としての公認を受ける。断念も沈黙もなく、僕らは現実というものに取り囲まれ、

あるいは貫かれ、そして総括されている。

いわばそこが旅の出発点であり、旅の終着点でもある。だがそれは現実的であるということとは違う。現実というのはいわばひとつの総括図なのだけれども、現実的であるということはいわばその総括図に従うということだ。そこから旅という発想は生まれてはこない。また一方、現実という総括図はそこに非日常としてのロマンを組み込んでみている。だから、中国四千年も異郷としての中国も、とても現実的にそこにあるのだ。そうそれらはそこに、ある。そしてとにもかくにも僕は行くのだ、とりあえずの現実的なロマンを求めて。そして知る。ないのだ、と。旅とは現実という総括図を迷走し、あるいは誤って現実的なロマンのその底を踏み破ってしまうことなのかもしれない。現実的なロマンの底を踏み破るとき、そこにかいま見えるのは、現在というおよそ不確定で、流動的で、名付けようのない有象無象の動き回る混沌であり、その混沌の表面を動き回るある種の非在（旅人）としての僕という現在なのだ。

誰も、現在というもの、あるいはことを知りつくすことはできない。あるいはいくら大切な瞬間だと思っても、それをつかみ取ることはできないのだ。それをもしかしたらある種のロマンでおおいつくすことはできるのかもしれないけれども、むしろ僕らはロマンの嘘を っているし、嘘だと知りつつもロマンと戯れ、あるいはロマンをゲームしている。ロマンが断片でしかないということを知りつつも、それでも本場のロマンを求めて、あるいはささやかでもこの手に実感できるロマンを求めて旅をするのだ。それはロマンを窒息させる現実というものからの逃走でもあるし、つねに手のひらをこぼれてしまう現在というものに対する悔恨であり、焦燥でもある。

旅において僕らが知るのとは、現在（ロマンが生成する現場）というものの不思議さだ。時間の経過、場所の移動とともに、現在というものがどうしようもなく通り過ぎてしまう、その喪失の感覚。現実に対するある種の非在、旅という自由の感覚はやがて芽生える喪失感によって凌駕される。非在者のかたわらを通り過ぎていく、ついに不確定な現在という混沌。そして旅は終わる。誰も非在のまままで終わるわけにはいかないのだ。現在という大切な瞬間をより深く生きたいと願わないものはいない。つまりその瞬間が、旅が現実へと着地する瞬間だ。現実というのは人が現在というものを生きるためのただひとつの回路としてあり、いわばそれは不可避なのだ。このことは現在というものが可能性であり、自由であり、現実というものが不可能性であり、必然であるということを必ずしも意味しない。現在というものは現実としてのみ可視のものであるということだ。現実というのとはひとつの場なのだ。現実に降り立つということと現実的

あるということとは何の関係もない。

旅人が現実に着地するとき。それはいわば非在という小さな垂直性が、現実という壮大な水平性に着地するときだ。旅人はそこで小さな身震いをする。

*

北京。午前七時、一九九三年、六月二二日（火）。三三二次快客列車、車中。

昨夜、大同を出発したときには、車両に十人程度の客しかいなくて、二人がけの硬座座席の四人分を占領して、悠々自適の一夜だったのだけれども、目覚めると車中の様相は一変。通勤列車の雰囲気なのだ。座席の間にたちんぼうの客はいないけれども、ゆつくりと横になっている雰囲気ではない。あわてて僕は座席に座りなおし、窓枠に肘を支えて、まだ覚めやらぬ視線をぼんやりと窓外に漂わせる。

外は田園。そして少しずつ中国の首都北京の郊外らしくくすんだような建物の密集が現れてくる。

不思議な気分だ。見知らぬ都会へとこれから足を踏み入れようとしているのに、まるでどこかの旅から帰ってきたような感触。その帰郷がたまたま平日の通勤時間にぶつかって、通勤客たちの日常の空気にいあわせてしまつて、どことなくいづらいうような、どことなく安堵するような、不思議な気分だ。中国をぐるつとひとまわりする約二か月間の旅を終えて、もうほとんど先が見えてしまつたということなのだろうか。

列車は午前八時前に北京東站到着。ほぼ満員の乗客に押し流されるようにして改札を吐き出されると、そこは首都北京の駅前とは思えないような路地裏の様相だ。人々はそれぞれの目的の方へと、まるで脇目も振らぬような様相で歩いていく。改札を出たところに二、三台のミニバスが止まっていたけれども、脇目も振らぬ乗客たちの勢いに圧倒されて、僕もとりあえずその裏路地を抜け出ることにしたのだ。

真夏の朝のような暑さだった。重い荷物を抱えながら歩いていると、すぐに汗が吹き出してくる。裏路地のような細い道から大通りへと出て、さらに天安門前からずっと東に延びている建国路へと出るころには列車で一緒だった乗客は誰もいなくなつて、僕はひとり建国路の歩道に立ちすくむ自分を発見するのだ。目の前の建国路を続々と、自動車や、バスや、黄色いタクシーや、同じく黄色いミニバンのタクシーが通り抜けていく。そのけたたましい騒音と、時速数十キロの速度感覚に、すぐにはとても適応できない。

やがて、とぼとぼと建国路を歩き始める。敦煌で一緒だったヒゲとスカシの二人連れから教えられた安宿、僑園飯店は天安門をまっすぐに南に下ったところ、永定門駅の近くにあつたからだ。建国路のどこからバスに乗って一度北京站まで出て、そこから永定門站（北京南站）行きのバスに乗り換える必要がある。とは言つても建国路をそこからどちらの方向に歩けば最寄りのバス停があるのかが分からない。というわけで、とりあえず北京站の方に向かって歩き始めたのだ。

建国路の道幅の広さといい、バス停までの距離といい、ずいぶん大づくりな街だと、僕は思う。びつしよりと汗をかき、重たい荷物に体を軋ませながら、僕は歩き、ようやくバス停にたどり着いたのだ。折よくやって来たバスに飛び乗るが、通勤客らしき人々でバスは満員。僕は見知らぬ都会で右も左も分からぬ田舎者にでもなつたような気分だ。

北京站前の広場は停車したバスや人々の雑踏でとても窮屈な印象だ。とりあえず『最新交通旅游図』というものを買ひ、それから永定門駅行きの路線バスを捜す。路線によつて始発の場所が違ふので、今朝初めてこの街に足を踏み入れた者としてはとてもとまどつてしまうのだ。しばらく駅前広場をうろろとし、ようやく五四路バスを発見した。

北京站を出発したバスは、崇文門東大街、前門東大街という繁華な通りを西の方へと走り、天安門広場の南をかすめるようにしてそこから前門大街、永定門大街と一路南へと下つていく。とは言つても、どれも交通量の多い道路で渋滞がひどくて、バスは遅々して進まない。結局、北京站から永定門站まで、三〇分以上もかかつてしまった。そこからは僑園飯店までは歩いて十分ほど。ようやくの思いでたどり着いたという感じだった。

僑園飯店のフロントには数人の外国人バックパッカーたちがたまつていた。従業員と彼らとのやり取りを聞いていると、どうやらドミトリーは満員、七〇元のツインならば空いているということらしい。それでももしかしたらと思ひながら従業員に尋ねるのだが、やっぱり没有。がつくりとした。バックパッカーたちは二人ずつツインに入ることにしたようで、どこかかへ行つてしまふ彼らを見ながら、僕はひとり取り残されたような気分になつてしまった。

どうしよう…と、僕はめまぐるしく頭の中で考えていた。北京には数日滞在するつもりなので、一泊七〇元のツインに入ることは問題にはならないのだけれども、といつても他に安宿の情報があるわけではなく、また北京東站からここまでの道程を考えてみても北京はとても広くてどのように足を踏み出せばいいのか見当もつかないのだ。

しばらくガイドブックとにらめっこし、そしてふと思ひ当たる。ヒゲとスカシは僑園飯店裏の招待所のことを教えてくれたのだ。その招待所

の名前が分からなくて、僑園飯店の裏だと彼らは言ったのだった。僕は僑園飯店だとばかり思い込んでいたけれども、ふとそのことを思い出した。その招待所はガイドブックでは国家留学生招待所として紹介してある。

いったん僑園飯店のロビーを出て、その裏へとまわってみると、すぐに国家留学生招待所は見つかった。こここそ本命！と意気込んで眼務員に尋ねると、あつさり没有という答え。没有…と眩きながら、がっくりとうなだれていると、かわいそうに思ったのか、助け船でも出すような様子で、眼務員は、

「多人房ならありますけれども…」

と言うのだった。僕の中国語がまずくて、部屋を捜していると勘違いしたのか、ともかくその一言で僕は急に元気になったのだった

ドミトリ（一泊二五元）の扉を開けると、病院の大部屋のような八人部屋で、ほぼ満室のようだ。同室者たちは出払っていて、部屋には僕ひとり。僕は病院のような鉄パイプのベッドに腰を下ろした。初めて訪れた大都会北京において、それが初めて手に入れた僕の場所というような気がした。

しばらく休憩したあと北京の街へ出てみることにした。目的のひとつは天津発神戸行き船のチケットを手に入れること。六月二十八日（月）発の便があるはずなので、それで日本へ帰ることにしたのだ。とは言っても、空きがあるかどうかは少し心配だった。なにしろ七月の最初には職場に戻るという約束だったからだ。

天津、神戸を往復する燕京号のチケットは建国門の近くにある北京旅遊大厦で売っているというガイドブックの情報だ。建国門といえば、さつき東駅から北京駅へのバスで通ったところだけれども、そのときはとにかく宿に落ち着くことしか考えていなかったのだ。燕京号のチケットを手に入れることができれば、少し北京の街をぶらついてみよう。とりあえず、鐘楼、鼓楼のあたりなどを…。

ホテルから外へ一步を踏み出すと、ひどい蒸し暑さだった。つい一、二週間前に高山、砂漠地帯で凍えていたことがまるで嘘のように思われた。まるで夢の中のことのようにも思われ、一気に現実というものが暑さとともにやって来たという感じだ。和平飯店前の道には外国人旅行者を目当てにしているような雑貨屋や食堂などが並んでいる。道を歩いていると、「チェンジマネー？」という声が飛び込んでくる。あとで世話になるだろうと思うので、軽く「あとで」と応える。永定門站（北京南駅）の付近は北京の南はずれということもあって、ひどく汚れた感じだ。建物も汚れているし、建物の脇には路上生活者の物と思われる空き缶やふとんや

火を燃やしたあとなどが残っている。

永定門からバスで北上すると、前門大街。ここは北京の下町の中心ということで、かなりの繁華街になっている。道路には車やバスが数珠つなぎに往来し、歩道は行き交う人々で賑やかだ。とくに前門大街の突き当たりのあたり、ここで道路は天安門広場の両側を通る二つの道路に分かれるのだけれども、そこは前門を中央にした半ロータリーのようになっていて、バスの発着場所もあり、歩道には快餐やいろいろな食べ物の屋台が並び、ひしめきあうような人通りだ。

人々の雑踏を抜け出て、天安門広場の東側に沿って歩いた。薄い曇り空にもかかわらず、あるいは曇り空だからと言うべきだろうか、むつとするような暑気が地上には立ちこめていた。額の汗を拭い、いくども立ち止まりながら道を歩いた。前門大街の賑わいと人々のひしめきが嘘のような、なにかガラーンとした印象だ。と言うのは他でもない、天安門広場の印象なのだ。

天安門広場の南には毛主席紀念堂があり、中央には人民英雄紀念碑があるのだけれども、天安門広場を目にするとき、人がまず驚くのはその広さだろう。しかも一面に灰色の敷き石が敷き詰められているだけで、なんの飾り気もない。囲いもなければ仕切りも壁もない。そこに地方からの観光客や外国人の観光グループの姿が見えるだけだ。ただ一面の広大な灰色。八九年五月の第二次天安門事件と呼ばれる学生・市民たちの闘いと人民解放軍による弾圧の痕跡もそこにはもはや見ることはできない。ただときおり警備兵の姿が見えるだけ。曇天の下に、ただ広く、広大な天安門広場。僕は立ち止まり、立ちつくし、ガラーンという音さえ反響しそうな天安門広場をしばらく見つめた。

天安門広場の東には中国革命歴史博物館がある。毛主席紀念堂や天安門、故宮の見学は明日ということにして、とりあえず革命歴史博物館の見学だけしようと思う。

高い石柱のそびえる立派な前門を通り、広い中庭を渡り、博物館の中へと入っていく。入場は三元。しかし革命歴史はいつたどこへ行つてしまったのか、展示物は友好各国から中国の高官に贈られた品々ばかり。それはそれとして、各国自慢の品々で、それぞれの文化や歴史が感じられて面白い展示ではあったけれども、激動の中国現代史を期待していた者としては、なんだかだまされたような気もしたのだった。

博物館前の巨大な石柱にもたれて、休憩。地方からの観光客らしき人々も、立ちつくしたり座り込んだり、思い思いの格好で、なすこともないように休憩していた。天安門広場は暑くまた広大で、僕らはいつたどのようにして、なにかから手をつければこの北京という街に触れられるのか、と

まどつてしまうのだ。

意を決して立ち上がり、天安門広場を渡る。前門から地下鉄に乗って、建国門へ。旧内城をまわる環状線は八四年に開通したそうだが、交通渋滞もなく、やはりとても便利だ。料金は一律の五角。座席に腰を下ろして、地下鉄特有の響きに包まれていると、まるで日本のどこかの都市にでもいるような気がしてくる。

建国門から北京旅游大厦までは歩いて十分ほど。建国門を東に抜けると、そのあたりは道路ばかりが広く、なにかがらんとした印象だ。高級ホテルのビルがいくつかそびえているのだけれども、人通りは少ない。正確な場所が分からないので、長富宮飯店の服務員に尋ねて、場所を教えてください。

六月二八日の便に空きがあるものなのかどうか、少し心配していたのだけれども、天津発神戸行き燕京号のチケットはあつけないほど簡単に手に入れることができた。二等A（ベッド）のチケットが二三一〇元。しばらく中国を貧乏旅行してきた者としては目玉が飛び出るほどの値段なのだけれども、日本円では約二万六千円、決して高くはない。チケットを手にとると、いよいよ中国大陸をあとにする日が確定したということ、少し寂しいような、ほっとするような、複雑な気分が胸を過ぎった。

北京旅游大厦のビルから足を踏み出したとき、突然強い風が吹き、あたり一面に砂埃が舞った。とてもひどい砂埃で、僕は立ち止まって、袖口で目の辺りを被うようにして砂埃が治まるのを待った。ふと、ラサから長いバスの旅を終えてゴルムドに到着したときに出くわした砂嵐のことを思い出した。ゴルムド…。砂漠のただ中で、ただうずくまるようにして耐えている街。ホテルの巨大な建築の下を歩きながら、あれから今までのことがまるで瞬時のことのような、まるでゴルムドも北京も同じ場所のことで、ただ次元の底をひとつ踏み外しただけのようにも、僕には思われるのだった。

再び建国門まで戻り、地下鉄で鼓楼大街へ。鐘楼、鼓楼は故宫をずっと北に上がったところ、旧内城内の北の方にある。

地下鉄は確実で便利、と思いつつ揺られていると、車両はスピードを緩めないまま、鼓楼大街を通り過ぎてしまった。どうやら急行に乗ってしまったようなのだ。仕方ないので次の停車駅で乗り換え、ひと駅戻る。

地下鉄の階段を登りきると、雨が降っていた。右も左も分からない場所なのでとまどったのだけれども、とりあえず高架道路の下で雨宿り。煙草を一服。傘を持って出なかつたことを少し後悔したけれども、本降りという感じではないので、なんとかなるだろうと思う。

少し雨足が弱まったのを見計らって道路を渡り、鼓楼の方に向けて歩き始める。いかにも下町という印象の静かな通りだった。人通りも少なうたまに車が通り抜けていくだけ。建物の軒から軒へと移るように歩いていく。雨足が強くなると、少し広い軒先で雨宿りをした。そのようにして三〇分ほど歩いただろうか、しかしいつこうにそれらしい場所には着かないのだった。幾度も地図を調べ、横道に入ったり、また戻ったり。ようやくにして僕は、地下鉄の駅から南へ行くつもりが北の方へと歩いてきたことに気づく。しばらく立ちつくし、それからとぼとぼと後戻り。ふと停留所を見つけ、バスに乗ることを思いつく。鼓楼までは一角。

ようやくたどり着いた鼓楼だったけれども、改修工事中中に入れず。鼓楼の方は鼓楼の裏手（北側）に位置するのだけれども、下町の中にポツリとそれだけがそびえているという印象だ。こちらの方も楼上には登れないようだったので、楼の下で休憩をした。

鼓楼、鐘楼は元代の大都の中心だったということだ。元、明、清代には鼓楼の太鼓の音が人々に時を知らせた。今このあたりには胡同（フートン）と呼ばれる古い街並が残っていて、一步裏通りに入ると、時が止まったかのような静けさだ。僕はふと于さんの家はこのような所なのかもしれない、と思う。

雨上がり。何かが一新されたかのような下町の新鮮な雑踏。鼓楼からそのまま南へ、故宮に突き当たる道を歩き、途中のバス停で、バスに乗り、前門へと戻る。

前門大街の写真、時計修理、メガネの店で中国旅行の写真十本の現像、焼き付けを頼んだ。一本が一七・三元。仕上がりは翌日。

バスで永定門站まで戻り、招待所付近の食堂で夕食。

招待所一階の売店で買った冷えたビール（燕京啤酒）を飲みながら、北京での一日を見送っている。初めての街に着いて、まだその現実というものに着地できないまま、口数少なく歩きまわった一日。

ドミトリの部屋にはいろいろな国からやって来た若者たちがくつろいでいる。北京や中国そのものが目的という者は少なく、ほとんどはシルクロードやチベット、あるいは雲南などの辺境を目指す者たちだ。目的地に腰を落ち着けるといふ雰囲気はなく、誰もが通りがかりにいあわせたと印象。どこから来て、明日はどこ、という会話。

日本人の若者からイカサマにひっかかったという話を聞いた。招待所を出てすぐのところは何軒かの雑貨屋が並んでいるのだけれども、その付近に出没する。良いレートでの闇両替を持ちかけてくるのだけれども、話に乗って両替をすると、言っていた金額に足りない。そのことで文句を

言うと、改めて数え、謝りながら不足分を足すふりをして、逆にごっそりと札を抜き取るというイカサマだ。気づいたときにはもう誰もいない、という寸法。闇両替だから公安に訴えるわけにもいかず、とても腹が立ったという彼の話。手持ちの人民幣が残り少なくなってきたので、僕は少し不安になる。そんな状態ではおちおち闇両替を利用することもできないのではないかと。と同時に、まさか自分はそんなイカサマにはひっかからないよと、タカもくくる。彼によると、通りがかりの奴らは無視して雑貨屋で両替をすれば大丈夫という話だったけれども。

もうひとりの日本人の若者（立派なカメラ機材を持ってきていたので、仮にカメラと呼んでおこう）。彼は韓国を経由して中国に入国したのだけれども、これまで中国の東北部を回ってきたということだった。旧満州は平田さんの思い出の地でもあり、今回の旅では時間の関係で断念せざるをえなかつた地でもあるので興味をもって彼の話を聞いたのだけれども、とにかくホテル事情が最悪だったということだ。高級なホテル以外には安宿もドミトリもなくて、泊まれる宿を見つけるのにとっても苦労したという。どのようにして安い宿を確保したかというのと、とにかく一軒一軒招待所を当ってみるということしかないのだ。そのほとんどは外国人を泊めてはくれないのだけれども、ごくたまに泊めてくれる招待所があるということだ。二か月間の旅行で少しは中国というものに慣れたつもりだけれども、最初に東北部をあきらめて良かったと、へんな納得の仕方をしてしまったのだった。

カメラとの話で、明後日一緒に万里の長城の見学に行くことにする。そのために明日、それぞれで三三三次列車の青龍橋までのチケットを買っておくこと。